

“育児の志をり”にみられる歯科的事項

谷 津 三 雄** 米 長 悦 也**
松 本 好 正** 栗 山 稔**

緒 言

明治初期の頃の小児科書は、近藤鎮三訳「母親の心得」（明治8年）、沢田俊三訳「育児小言」（明治9年）、石田勝信著「小児養育心得」（明治11年）、杉山由啓著「育児須知」（明治14年）などの書名にみられるように一般向きのものが多い。

明治21年10月、東大小児科初代教授弘田長が「児科必携」を発行し、大正15年に最終版（第15版）をみるまで多くの医家に読まれたが、それ以来一般向きの小児科書はしだいに減少していった。このような時代背景のなかで、長井岩雄著「育児の志をり」¹⁾（明治45年1月14日発行）はその書名が示すように一般向きのものであるが、内容は立派な小児科専門書である。著者の長井岩雄は、ベルリン大学小児科のホイブネル教授の指導を受け、明治39年ドイツより帰朝したドクトルであり、このことはその序文より知ることができる。

——恩師伯林大学教授小児科主任プロフェッソル、ホイブネル氏指導の下にて余の研究したる事、並びに欧州諸大家の説をも参酌して此一冊子をなせり、名づけて育児の志をりと云ふ……夫れ慈母が日夕育児の志をりとなり又助産看護の道に従事せらるる人々の臨機参考のしるともなれば——

しかし、参考書目としてあげた文献をみると、著者の恩師の著書 Heubner, Kinderheilkunde

（1903—1906）などの洋書が19種のほか、香月啓益著「小児必要養育草」、見原篤信編録「養生訓」、弘田長編纂「児科必携」などの和書も6種あり、計25の文献を参考にして書かれたことがわかる。しかも、これらの参考書は1903年（明治36年）から1910年（明治43年）までの洋書に、弘田長著「児科必携」（明治42年）、土肥慶蔵著「皮膚科学」（明治43年）、横手千代之助著「衛生学講義」が参考文献としてみられるように、当時としては小児科を中心とした最近知識（本書の出版は明治45年1月であり著者のはしがきは明治43年9月である）の集大成である。そこで、約70年前の一般向小児科書のなかで歯科をいかにとりあつたっているかを摘録し、小児歯科学史の一端にしたい。

長井岩雄著「育児の志をり」について（図1）

15×22 cm 大の洋本、本文363ページ、子守唄6ページ、計369ページ、明治45年1月14日発行、金1円30銭、印刷所秀英舎であるが、丸善書店、六合館、南江堂より発売していた。全一冊であるが、その内容は上巻の総論（図2）、中巻の各論、下巻の各論（救急法）（図3）、附録及び子守唄に分類されている。なお、漢字にはかなを付し読みやすくしてある。

上巻における歯科に関する事項

小児身体發育の事：生後満一年迄を四期に區別すれば最も便利なり、第一の三ヶ月、第二の三ヶ月、第三の三ヶ月、第四の三ヶ月とし、第三の三ヶ月の初めまでに上下門歯生ゆ、第四の三ヶ月にて周囲の物に捉まり歩行を試み誕生前後に於てすでに歩行す。又此時期に於て多くは顚門閉鎖し上下八枚の歯生ゆ。

生齒の事：齒牙の發生も亦小児の順当に發育す

* Dental Matters of “Ikujinoshiori”

** Mitsuo YATSU, Etsuya YONENAGA, Yoshimasa MATSUMOTO, Minoru KURIYAMA: Department Anesthesiology, Nihon University School of Dentistry at Matsudo 日本大学松戸歯学部麻酔学教室



図 1

育児のあかり 上巻 目次	
総論	頁
育児に就て一般の注意	五
小児身體發育の事	一〇
小児體重の事	二三
身長胸圍頭圍の事	一九
小児の脈搏の事	二一
小児の呼吸の事	二三
小児の體溫の事	二四
生齒の事	二五
顚門(ひよめき)の事	二九

図 2

育児のあかり 下巻 目次	
各論	頁
乳母車の事並に子供を育負ふの利害	一九五
生齒時小児の身軀に異常を來す事	一九八
種痘の事	二〇〇
種痘の時期	二〇一
種痘後の注意	二〇二
種痘の式	二〇五
小児の娛樂並に玩具の事	二〇六
小児の皮膚を強壯にする法	二〇八
着物を着換ゆるときの注意	二〇九
早産兒の所置(月足らず子の事)	二一〇
涎れ掛けの事	二一五
襁褓の事(おしめ)の注意	二一六
小児に賣藥を服ますの可否	二一九
産婆の撰擇の事	二二〇
子守の撰擇及び注意	二二二
小児に鍼灸の利害の事	二二五
身軀虛弱なる童女を強壯になすの法	二二八
育児日誌の事	二三二
小兒病一般の注意	二三五
芥子泥の製法及用法	二三八
巴布の製法及用法	二三九

図 3

るか將異常の發育をなすかを判断するに必要な
注目点の一なり、すべて健康なる小児は歯牙の發
生整然として来り、不健康の小児は不規則に來
り、或は發生の時期遅延することあり、今生齒を
前後の二期に分ちて其順序を示さんとす。

第一生齒期、即ち乳齒發生は生後六ヶ月乃至九
ヶ月にして始まり、第二生期、即ち永久齒發生は
六歳乃至七歳より始まる。

第一乳齒發生の順序：生後初めて發生する乳齒
即ち下門齒二個は六ヶ月乃至九ヶ月にて生え其後
約一ヶ月乃至一ヶ月半位にて上門齒二個生ゆ、夫
より多少の間を置き初年の終頃即ち十ヶ月乃至十
二ヶ月にて上下門齒の兩側に各一個宛の切齒發生
す、其後間もなく四個の小白齒生え第二歳の中頃
に四個の犬齒（系切齒）生え又第二年の終或は第
三年の初頃に四個の第二小白齒發生するを正常の
順序とす、今図を以て示せば上の如し、**図4**が示
されている。

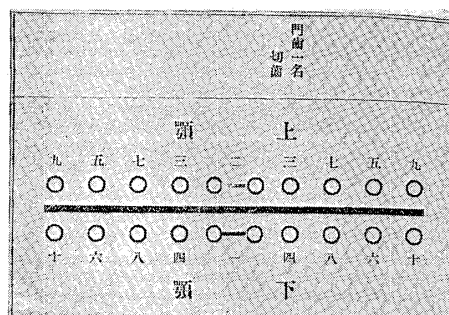


図 4

第二永久齒發生の順序：六歳の終頃に始まるを
普通とする、即ち二十個の乳齒前きに生えたる順
序にて脱落すれば續て新たなる二十個の永久齒凡
そ其順序にて發生し又四個の第一大臼齒生え、第
十二歳或は尚ほ後に至り四個の第二大臼齒發生
す、所謂第二智恵齒は決して小児期に生ゆるべき
ものにあらず、第十八歳二十七八歳にて始めて發
生するを常とす。

右の如く順序正しく齒牙發生せずして屢々破格
の生齒あり例えば五ヶ月にて已に生齒するあり或
は八ヶ月乃至九ヶ月にて始めて第一の生齒を見る
ことあり、されば之等は未だ病的として見做すも
のにあらず。

間々乳齒の發生著しく遅延し第二年の終頃始め
て發生し其發生も一定の順序に來らず或は長く間
を置き加えず一對にあらずして個々發生すること
あり、斯かる不規則なる場合は營養障礙又は英国
病其外遺伝病等之が原因たりと知るべし、と記載
されている。これを今日の基準小児科学²⁾には
「齒の萌出には、第1、第2の生齒期がある（**図**
5）、個体差が大きい、第1生齒期は生後7～
8ヵ月頃に始まり、生後2年半頃までに20本の乳
齒が生え揃う、乳齒数＝月齡－6の式で大体の乳
齒数を知ることができる、乳齒が完成して数年を
経てから第2生齒に入る、すなわち5～7歳に至
って、第1大臼齒が生え、次いで乳齒がその萌出
の順序に脱落して永久齒が萌出する」と記載さ

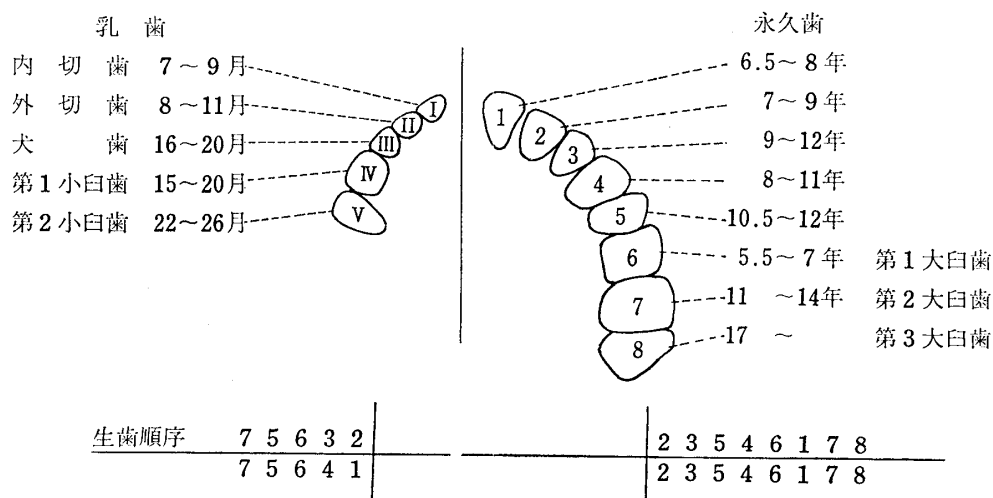


図 5 蒲生逸夫著：基準小児科学，8 ページ

れ、また中山健太郎³⁾ 編小児科学には「生歯：乳歯は上下および左右のおのの切歯 2，犬歯 1，臼歯 2，計 20 本より成る。生後 6～8 月から生え始め，1 歳で 4/4，2～3 歳で 10/10 で発生し終わる。永久歯は上下，左右の切歯 2，犬歯 1，小臼歯 2，大臼歯 2 + 1，合計 32 本より成る。6～8 歳から生え始め，大臼歯の 1 を除き 10～14 歳までに 28 本が生える。

歯の化骨，萌出，脱落はほぼ一定の順序で進行する。歯胚の石灰化，象牙質およびエナメル質の形成は，すでに胎生期に始まる。乳歯は胎生期に，永久歯は主として幼児期に作られる。石灰化には，十分なカルシウム，ビタミン A, B, C, D, 蛋白質の摂取が必要である。生後に栄養に注意して良い歯を作ろうとするのは，主として永久歯が目標で，近々に萌出てくる乳歯に対してではない。」と記載されている。即ち，これらの最新小児科学書の記載と比較しても全く遜色がない。

口中摂養の事：……味感及舌の触感は既に嬰兒の時より鋭敏なるものなり，さて小児の口内粘膜は至て薄弱にして些少のことにも毀損し易く夫れより黴菌侵入して種々の病気を惹起するなり，例えば水癌，鰐口瘡の如き最も恐るべき小児の口中病なり，されば乳児の口内に乳渣溜りし時は怠らず洗滌し又僅かの損傷糜爛も速に医に頼み相応の手当をなすべし，併し口内別に異常なき限りは殊更にガーゼなどにて毎日拭くを要せず，却て粘膜を毀損するの恐れあればなり……口は種々の毒物或は空気を介し或は飲食物に混じて体内に入るの通路なるが故に慈母は時々愛児の口中を点検すること必要なり，従ってゴムの乳頸は毎日数回沸湯にて洗ひ，また母の乳頸も能ふべくは授乳の都度微温湯にて洗滌すべし，殊に又生歯期に至れば歯齦に一種の痒感あるが故に小児は頻に口中を気にし，或は母の乳頸を噛み或はすべて見るもの手に触るゝものを齧り如何にも不機嫌にして或は熱発吐乳等あり，斯る場合には慈母は別して注意すべし，さて小児追々に成長し歯牙発生したる時は従て歯の養生また肝要なり，

歯の養生の事：歯は生後六七ヶ月より生え始まり一年半乃至二年半位にて出揃ふなり，之を乳歯

と云ひ六七歳頃にて永久歯と交換するなり，抑も歯は消化管の入口に位して総ての食物を細挫咀嚼し後方食道に輸送し得る様にする大切な役目にして実に消化道の門衛なり，若し夫れ流動物は其儘後送り固形物は一々歯の点検を受けて所謂口内の消化液（唾液にて第一の消化を成し胃に送りて第二の消化をなし得る様にするなり，故に若し歯牙不完全なときは食物を咀嚼すること能はず其儘胃に送るが故に胃は全力を尽して食物消化の任に当れども終には力竭き充分の消化を為し能はず，それが為め却て胃の病氣となるなり，若し胃健全ならざれば仮令滋養物を摂取するも消化吸收すること能はずして其儘消化管（胃腸）を通過し終に身体の栄養不良となり，夫れより又種々の疾病を誘起す，されば歯は体力維持の上には実に重き役目と云ふ可し，因て小児の時より大切に保護せざる可からざるは云ふ迄もなく又父母は気を付け毎月一回子供歯を点検すること最も肝要なり，若し齲歯其他歯齦に病氣ありと思はば速に夫れ相応の手当をなすべし，さて歯を健全に保護する予防法は，第一，子供の時より食後必ず稀薄なる茶を以てうがひする事，第二，乳歯交換期に至りふらふらしたる歯はなるべく早く抜歯すること，第三，若し齲歯あらば直に歯科医に頼む事，第四，殊に牛乳を飲みし後は必ず口中を湯水にて漱ぐ事，第五，ざらざらしたる歯磨粉にて無暗に歯を磨く可からず却て柔軟なる歯刷子にて毎朝歯齦を軟く磨擦すべし，とその予防法について述べており，歯は体の維持に最重要であること，それには小児の時より歯の検診の必要性が大であると強調しているなど，今日と変わるところがない。

しかし，牛乳を飲んだ後は必ず口中を湯水で含嗽せよとあるのは，当時は必らず牛乳に砂糖を加えてあったためである。本書の 127 ページに砂糖は単に牛乳を甘くするために加ふるにあらずして実に嬰兒の体力を補給するに大切な養素の一として加ふるなり，……牛乳に混和する砂糖に数多の種類あるが，普通の砂糖は到る処に得易く又其栄養価も相当に含有するが故に撰用すとあることより知ることができる。なお，当時の歯齦粉はかなり改良され良好なるものが出現していたが，ざ

らざらしたる齒磨粉とは房州の砂を含む洗粉をさしたものであろう。

中巻における齒科に関する事項

齒科に関する事項は少なく、驚口瘡、糜爛（頸腫、腋窩、膝窩等）、癰腫等の屢々発生するは栄養障害の徴なり、と營養一般について記されている。

嬰兒の口内を毎日数回「ガーゼ」などにて拭く利害：口内別に異常なき限りは其儘にして手を附けざるを良とす、しかし舌或は頬粘膜に乳滓附着し其外何か異常ありと思わば先づ母の手を能く洗ひ指頭に「ガーゼ」を捲き或は日常用ふる杉箸の先端を二つに割り之に脱脂綿を挿み固くクルクル捲き附け微温湯或は硼酸水、重曹水（百倍）を之に浸して徐々に洗ふべし、決して手荒く所置す可からず、但し哺乳前後口内をお湯にて清潔に拭く事は最必要なり。

小児の口内粘膜は至て薄弱にして些少の事にも毀損し易く夫より毒物侵入して種々の口内病となることは屢に目撃する事実なるが故に毎日慈母が小児の口内を点検するは最必要なれども、なまなか半可通の保姆などがいろいろいぢくるよりは寧ろ最初より口内に手を附けざるを安全なりとす、

生齒時小児の身体に異常を來す事：最初上下前齒の生える頃乃至奥齒の生ゆるときも小児屢々不機嫌にて昼夜とも能く安眠せずといと不安にして少しの物音にも驚き易く又齒齦に一種不快の感覺あるが故母の乳頸を咬み、或は玩具などをかぢり時として発熱吐乳青便下痢等あり、又時としては消化不良症を起して食慾不進となり或は不消化の大便を通じ或は又生齒の刺戟より腦に感じて所謂腦症を起し終に痙攣を發することあり、医学上之等の状態を名けて生齒熱或は生齒困難症と云ふ、又此時期に「プープー」吹き多くは涎を流して頤下湿れ之がために寒冒に罹り延ては氣管支加答兒となること多し加えて此生齒期には屢々真性の腦膜炎を誘發することもあり、実に小児のためには最も大切な時期にて間々又一種不明の如何にも重症に罹り居るかの如き容態を呈することあれば慈母は此時期は能く注意し子供の大小便其他熱の昇降等に氣を附け殊に盛暑の候などはなるべく炎

天に出さぬやうすべしと生齒熱について詳述されてある。なお、種痘の時期の項に、生後六七ヶ月にて恰も生齒時期に際し発熱、吐乳其他小児の身体に異常ある時は数日種痘を見合せ最も健全の時を待つべし、と注意をしている。

基準小児科学²⁾には生齒困難症とは齒の萌出の際に軽度の不機嫌、睡眠障害、流涎の増加や、ときに輕熱を認めることがある。しかし、高熱、痙攣などがあれば、それはむしろ齒以外の原因によると考えるべきであると記載し、また最新口腔外科学⁴⁾には、乳齒の萌出に関連する障害（いわゆる生齒病）とし、乳齒が萌出するときその部分の齒肉が発赤して齒肉炎の状態になることがある。同じ時期に乳兒が不機嫌となり、発熱、下痢、痙攣などの全身症状が現われることがある。このような全身症状は乳兒の約29%にみられる。これは俗に智恵熱あるいは齒牙熱と呼ばれて、従来は乳齒の萌出が原因と考えられていたのであるが、最近ではこれらの全身症状は齒の萌出とは関係がないという意見の人が多い、

さらに、最新小児齒科学⁵⁾では生齒困難症に関しては、昔は知恵熱という言葉が使われたが、齒熱、齒痙攣などという言葉も使われている。なぜ知恵熱といったかという昔は齒と精神発達との関連性を世間一般が大きく考えていたところから始まったように思われる、と記載されている。

この中巻の最後は「育児日誌の事」で、次のごとく記載されている。

小児生下の日より小学卒業まで生理的自然の發育状態及び不時の出来事など重要な件々を記載し置くなり、例ば何年何月何日何所に出生し何某と命名し出産當時体重何百匁にして一週の後は何百匁幾日目に始めて物を視つめ幾日目に初めて笑ひ大凡幾日目に母の顔を覚へ幾日目に玩具を握り幾日目に種痘を済ませ幾日目に下齒二枚生へ、さては何年何月卒然熱發体温三十八度に昇り咳嗽出又は吐乳青便下痢等の事一々記し置くべし、殊に体重は身体の發育を観察するに尤大切な關係あるがゆえになるべく毎日計測して日記にしるし置くこと肝要なり、余が著我子の成長は育児日誌としては尤簡便にして要を得たと思へば参照せらるべ



図 6

し、と巻末に我子の成長、一名育児日誌、近刊の案内がある。

なお、中巻にはお灸のこと、小児の腹部按摩法、小児に売薬を服すの可否、小児に鍼灸の利害の事、などの記載もみられる。

下巻における歯科に関する事項

小児病一般の注意、芥子泥の製法及用法、巴布の製法及用法、湿布帯の製法及用法など小児の看護法及び救急法が記載されているが、歯科に関するものはない。また、附録は滋養品並に嗜好品の調理法で、スープの調理法が多く記載されている。なお、この附録につづいて子守唄が日本歌謡類聚図(図6)とともに巻末に記載されていて、全く書名にふさわしい。

結 び

高山歯科医学院⁶⁾は明治32年(1899)東京歯科医学院と改称し、翌33年1月から授業をはじめた後、明治40年(1907)9月12日に専門学校令による私立東京歯科医学専門学校として認可、また明

治40年6月に共立歯科医学校が創立され、同42年6月日本歯科医学校と改称され、さらに同年8月に私立日本歯科医学専門学校になり、また明治43年5月に東京女子歯科医学校が開校され、翌44年12月に大阪歯科医学校が設立され、日本における本格的な歯学教育がはじまった。

一方、著者がドイツより帰朝した明治39年は歯科医師法が制定された年であり、それから明治43年9月に至る間に内外の文献と自分自身の経験をまとめ明治45年1月に出版したのが本書であることをあわせ考えると、この歯科的事項のもつ意義は歯学史上極めて重要である。

文 献

- 1) 長井岩雄著：育児の志をり、東京、秀英舎、明治45年1月。
- 2) 蒲生逸夫：基準小児科学、8～9、286～287、東京、新興医学、昭和53年4月。
- 3) 中山健太郎編：小児科学、23～25、東京、文光堂、昭和48年9月。
- 4) 中村平蔵監修：最新口腔外科、365、東京、医

歯薬，昭和50年12月.

- 5) 深田英郎他編：最新小児 歯科学，上，52，東京，医歯薬，昭和46年10月.

- 6) 今田見信，正木 正共著：日本の歯科医学教育
小史，14～17，東京，医歯薬，昭和52年10月.